

2013 年度点検・評価シート

I 評価項目・担当部局

対象部局	スポーツ・健康科学研究科
評価基準 2	教育研究組織
点検・評価項目(1)	2-1 大学の学部・学科・研究科・専攻および附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。
評価の視点	教育研究組織の編制原理
	理念・目的との適合性
	学術の進展や社会の要請との適合性
点検・評価項目(2)	2-2 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。
評価の視点	責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

II 【点検・評価項目ごとの現状説明】

2-1	スポーツ・健康科学研究科の教育研究組織は、1 研究科 1 専攻構成になっている。しかし、専攻はスポーツ関連分野と健康関連分野からなり、さらにスポーツ関連分野はスポーツ科学領域と応用スポーツ科学領域からなり、健康関連分野は健康科学領域と健康情報科学領域からなる。2008 年の設置を検討する段階では、2 学科で構成されているスポーツ・健康科学部を基盤とする 2 専攻の大学院設置を検討したが、財政上の問題もあり、現状の 1 研究科 1 専攻体制になっている。研究科の教育研究上の目的は、「スポーツ・健康科学研究科修士課程は、スポーツ関連分野と健康関連分野を配置し、スポーツや身体活動および健康や医療に関する分野横断的、学際的な教育研究を行うことで、幅広い視野と高度な知識・技能をもった専修免許を有する教員、各領域の専門的指導者および職業人を輩出することを目的とする。」となっている。このように 2 分野・4 領域体制の方が、それぞれの領域特有の教育研究を学修することで領域横断的な幅広い視野を持つ人材の育成が可能となる。したがって、現在の教育研究組織の構成は理念・目的に照らして適切である。しかしながら、教員の配置はスポーツ科学領域が 3 名、応用スポーツ科学領域が 5 名、健康科学領域が 4 名、健康情報科学領域が 2 名となっており、領域によって人員配置に偏りがあり、入試問題作成などの負担が平等ではない。
2-2	設置後 4 年が経過したが、これまで教育研究組織の適切性について定期的な検証は行っていない。したがって、責任主体・組織、権限、手続きも明確でなく、その検証プロセスも適切に機能しているとは言えない。

【効果が上がっている事項】

2-1	
2-2	

【改善すべき事項】

2-1	研究科委員長、専攻主任、大学院評議委員を含む自己点検評価委員会において 2 分野・4 領域体制の適切性について検証する。また、職務分担上の負担を平等にする配置について領域の名称変更、大学院担当教員増などを含めて検討する。
2-2	研究科委員長、専攻主任、大学院評議委員を含む自己点検評価委員会において教育研究組織の適切性、学術の進展や社会の要請との適合性を含む教育研究組織の適切性について定期的に検証する。

III 本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

--

2014 年度からの達成目標】

【達成目標】 目標の進捗状況は、「S：完全に達成」「A：概ね達成」「B：やや不十分」「C：不十分」で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの	評価					
			2014	2015	2016	2017	2018	
中期目標 (2014～ 2018)	研究科委員長、専攻主任、大学院評議委員を含む自己点検評価委員会において2分野・4領域体制の適切性について検証する。	「スポーツ・健康科学研究科自己点検評価委員会報告書」に検証結果が記載される。	→					
	職務分担上の負担を平等にする配置について領域の名称変更、大学院担当教員増などを含めて検討する。	検討結果が研究科委員会議事録に記録されるか、あるいは「スポーツ・健康科学研究科自己点検評価委員会報告書」に記載される。	→					

14 年度 目標	研究科委員会において、教育研究組織の責任主体・組織、権限、手続きを明確にする方法について自己点検評価委員会を中心に検討する。	検討結果が研究科委員会議事録に記録されるか、あるいは「スポーツ・健康科学研究科自己点検評価委員会報告書」に記載される。	→					
-------------	--	---	---	--	--	--	--	--